

地図でたどる跡見女学校

跡見学園女子大学 名誉教授

高橋 六二

平成27（2015）年に跡見学園は創立140周年を迎え、跡見学園女子大学は創立50周年に当たるのを機に『跡見学園女子大学五十年史』を刊行した。その第一部序章・第一章には東京での跡見女学校（神田・柳町・大塚と移転する学校の汎称としてこう呼んでおく）開学前後のことが、既刊の各年史に比べてより精確に記述されていてよかった。現在では地図の上でその位置や校舎等の配置も見ることができるので、後のためにそれを提示しておこうとしてこの稿を成すこととした。

地図1 跡見女学校の位置

- ① 跡見学校跡 ② 姉小路家跡 ③ 柳町跡見女学校跡 ④ 簗川神社 ⑤ 小石川消防署 ⑥ 跡見学園



この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図(東京首都・東京西部)を使用したものである(平成21・25年発行)。

中猿楽町に開校した跡見学校

跡見花蹊は、『跡見花蹊日記』第1巻(注1)によると、明治3(1870)年11月17日に京都を出発して東京に向かい、11月29日に築地の沢家(注2)に到着して東京生活を始めた。花蹊31歳であった。同書所収の「跡見花蹊略歴」明治4年1月の条には、さまざまな動きの中からの見聞に基づく感懐が、

当時東京の形勢、戦後と云ひ、実に令嬢とも云へき人へ開化ととなへて、髪をザン切にして、長き書生羽織を着、エン筆を耳に挟みて、ヘコ帯などして、実に殺風景を極む。予、この風体を見て、是を一変せねほと考ふ。女子教育の念甚だし。と記されている。この思いがやがて跡見女学校の創設に結実することになるのだが、明治5年2月には沢家の焼失があつて、4月には姉小路家とともに神田に引っ越した(注3)。ここでは私塾的な指導がなされている。

明治8(1875)年の開校は、日記や提出文書等によれば、

1月8日 開校式執行 跡見女学校と称して女子教育に従事

6月19日 中猿楽町13番地地所買得 地主山口県天野御民 地坪377坪余 価500円

7月10日 地券状請取 500円天野氏へ相渡

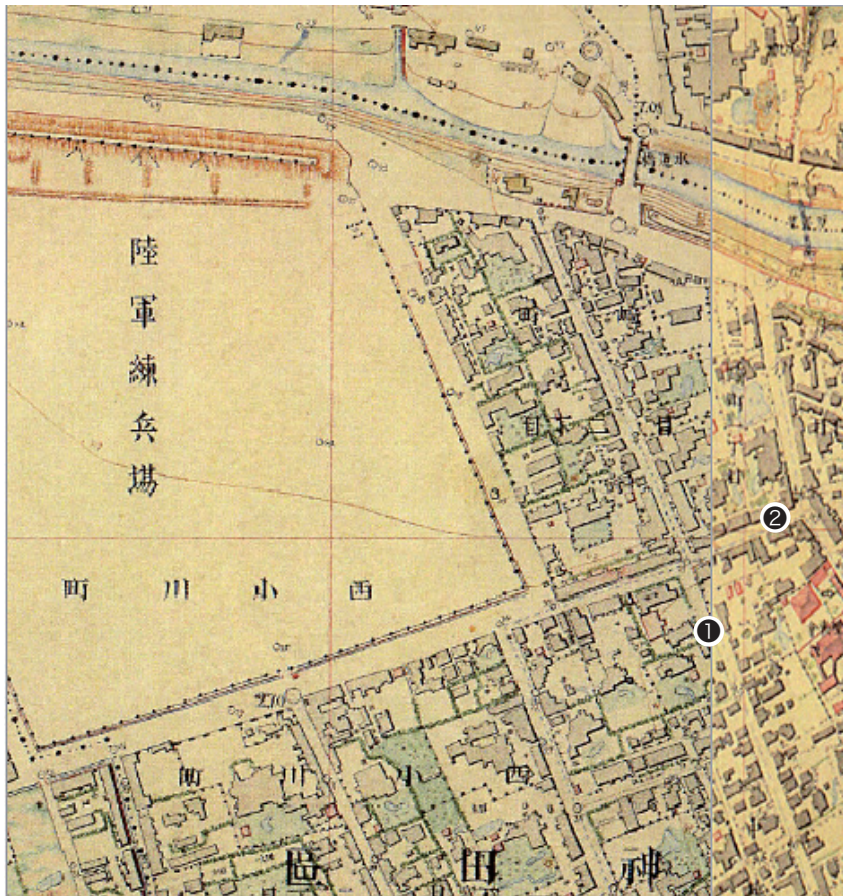
8月14日 塾棟上(以上、日記)

11月13日 「私学開業願」(位置 中猿楽町13番地 校名 跡見学校 宛先東京府知事)

明治16年7月 「学校開申書」(名称ハ跡見学校 位置ハ神田区中猿楽町15番地)

と進められる。

ただ、ここには校名・番地等に違いがある。校名はさておき、番地は『跡見開学百年』(注4)の前扉見返しに明治10年の地図が用いられていて、周辺の番地は「十三」となっているから、このあと地租改正にともなう地番変更があつて15番地となったのかもしれない。



地図2 跡見学校と姉小路家

① 跡見学校

② 姉小路家

さて跡見学校はどんな構えであつたのか。従来知られているのは開校時の校舎正面の写真と萬里小路伴子(跡見李子の姉堀田伯爵夫人)の校舎見取図である。ところが『五千分一東京図測量原図』(注5)を手にして驚いた。この本には参謀本部陸軍部測量局作製「五千分一東京図測量原図」と内務省地理局編「東京実測全図」とが収められている。いわば前者は

地形図、後者は地籍図である。前者の「東京府武蔵国麴町区飯田町及小石川区小石川町」（明治16年4月測期）と「同神田区駿河台及本郷区湯島近傍」（同年5月測期）から要部を合わせ拡大して示したのが地図2である。ここには平面的にはあるがものみごとに跡見学校の姿を記録しているではないか!! 当時の学校のようなすは藤井瑞枝『花の下みち』（注2参照）に詳しいが、学校の生垣としてバラが植えられていたことから、この学校は薔薇学校と呼ばれていたという。万里小路伴子の校舎見取図にもバラガキと記入があるが、「五千分一東京図測量原図」はそれをまで記している。この地はJR水道橋駅から白山通りを三崎町交差点まで行った西南隅に広がる、現在は千代田区西神田2丁目8番に属する一部分に相当する。『写真で見る跡見学園の歩み』（注6）には類似の地図が載っているが、それは明治20年のもので修正が加えられているようだ。

柳町に移転した跡見女学校

明治20（1887）年3月9日の「東京日日新聞」に跡見花蹊の死亡広告が出て、11日にそれは無根のことで花蹊自身が否定広告を出す、ということがあった。ところがこのことが意外な方向に展開していく。『跡見花蹊日記』第2巻に、

（3月）12日（前略）伊藤博文、佐野常民様、私の過日之凶事ニ付、先生こそ寿命万歳と呼ばれたり。此凶事を動機として一大学校建築之気運ニ及ふ。学校之地をいつれかと所々を尋ねて、今の小石川の地を覓る。此地伝通院より風転（瘋癲）病院之外、阿部邸跡之地のみ人家一軒もなく、すべて田圃のみ也。宮原六之助君も此地をと碇定ス。とある。学校移転に動き出すのである。続いて改築委員が選ばれ、相談会が行われ、8月9日を改築始とし、日を追って地棒（榜）表を建て、土盛り、地ならし、食堂・湯殿・庖厨所の上棟式、寄宿舎上棟式、住宅上棟式と進み、11月3日に講堂上棟式が盛大に行われたという。この時に塾の楼上から観た印象を、花蹊は日記に、

北ハ森林にて、西ハ伝通院、東ハ丸山田野にて稲実黄雲の如し。秋色尤佳。南ハ平地田圃中。此校舎之西、川あり。水清浄。裏門の傍に千歳橋あり。風煙奇絶可喜。

と叙している。この表現はいわば古代の国見歌の様式を思わせる。花蹊は国ぼめ・土地ぼめをしているのである。なんと、この日は天長節であった。12月25日移転執行、明けて明治21年1月8日、開校式が盛大に行われた。

跡見女学校は明治21（1888）年1月18日、神田から小石川区小石川柳町27番地への学校移転願を東京府知事宛に出している。その土地は「五千分一東京図測量原図」の「東京府武蔵国小石川区小石川表町近傍」（明治16年5月測期）（地図3）で見ると、あたりは確かに北隅に邸（「東京実測全図」に28番地表記）があるのみで一面「田」となっている。花蹊が「千歳橋」と言っているのは「千川橋」に相当しよう。花蹊の「千歳橋」は誤記ではなく、その時の寿福の意を表すためにあえて変えたのではなかろうか。ところで柳町の校舎と関連の施設はしばしば増改築がなされ、その写真や配置図もそろっているほうだ。それを見るには『跡見学園九十年』（注7）と『写真で見る跡見学園の歩み』（注6参照）が役立つ（注8）。

この柳町時代で特記しておきたいのは、まずは生徒数の増加とそれにともなう施設の拡充であるが、明治25年に万里小路桃子が花蹊の養女として正式に入籍、大正8（1919）年跡見李子として2代校長に就任、大正15（1926）年1月10日花蹊87歳にて逝去、ということがあった。ところがこの間に明治41（1908）年9月には全校舎が洪水にあうということもあった。29日夜からの豪雨で30日3時頃には全校舎水びたしとなり、

朝四時頃より、出入の者見舞に来る。予の居間ハ今一寸も水増したらは、畳も上る覚悟致し、道具諸類かた付る。（略）実に此水害ハ、小石川廿一年のはしめ也。毎も出水は門前迄と究りたりしを、いかなる事ならむ。小石川巡査等ハ船にて見分す（日記・第3巻）。

という状態であった。



地図3
移転以前の
柳町の土地



地図4 明治40年前後の柳町の女学校周辺
『江戸明治東京重ね地図』（注8参照）

しかしこの川も永井荷風には、

……植物園門外の小径は水田に沿ひたり。水田は氷川の森のふもとより伝通院兆域のほとりに連り一流の細水潺潺として其の間を貫きたり。是旧記に云ふところの小石川の流にして今はわづかに窮巷の間を通ずる溝坑となれり。嗚呼四十年のむかしわれはこの細流のほとりに春は土筆を摘み、夏は螢を撲ちまた赤蛙を捕へんとて日の暮るゝをも忘れしを。……(注9)

と心に記されており、また徳永直には、

以前は千川上水と申しまして、立派な溪谷の形態を保ち川も綺麗でありましたが、現在は田圃や河ふちを埋めたてまして、工場もでき、町も四つほどできまして、三、四万の町民が生活いたしております。……「谷底の街」は事実「太陽のない街」であった。……(注10)

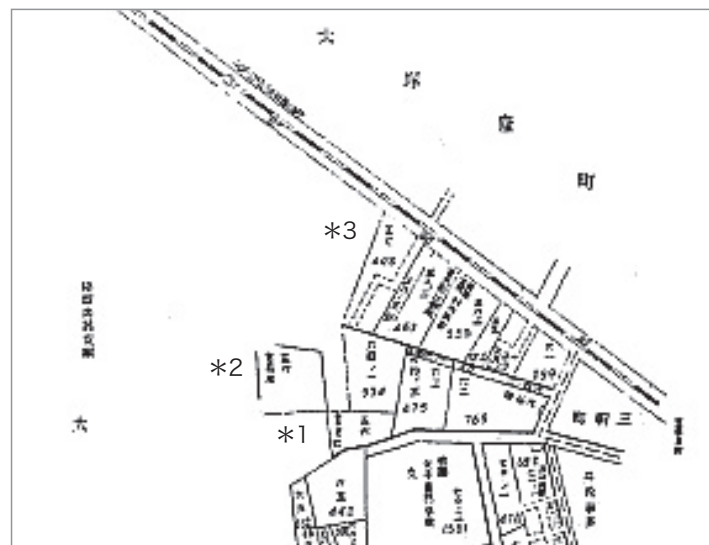
と把握されている。しかし千川はすでに暗渠化されて現在は千川通りという道路になっている。だから千川橋も地図の上でしか確かめることはできない。荷風のいう「氷川の森」は今の簸川神社のことで、その参道の階段に並ぶ玉垣の中段左には「跡見女学校」と記された他より大きめのものがある。それは、たとえば明治25年1月1日の花蹊の日記に「生徒越年者十三人。余、拉生徒、詣氷川神社」とあるように、花蹊は初詣その他でしばしば立ち寄ることがあり、李子もそうであった縁によるのだろう。ついでながら、そこから小石川植物園に沿った小道を行くと、小石川消防署裏手の垣根沿いに「御殿町尋常小学校跡」の案内板がある(写真)。それも跡見女学校に関わりがあるものだ。



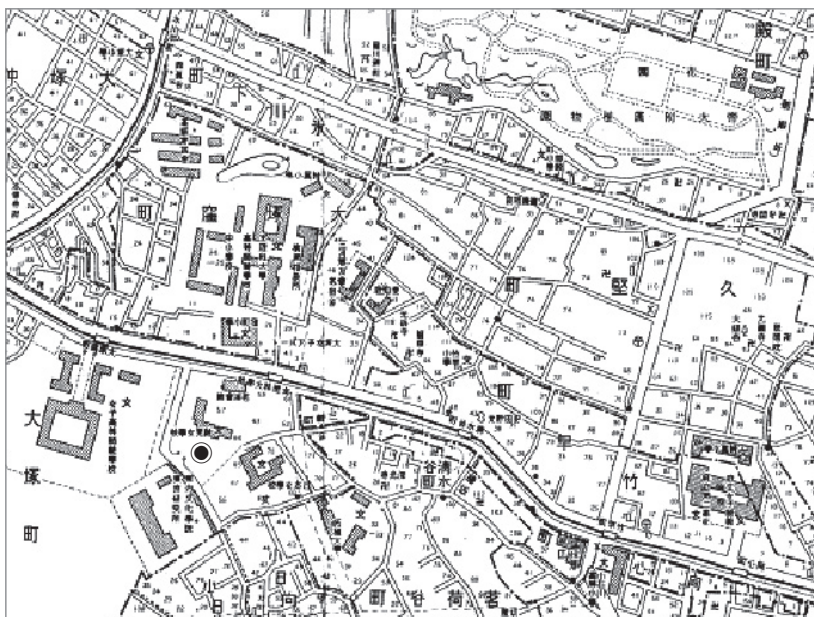
大塚で拡充する跡見女学校

昭和の時代になるや、跡見女学校は再び移転を考えなければならなくなった。元(1926)年1月に拡張基金としての校債募集を始め、5(1930)年3月18日 大塚町の陸軍兵器支廠跡の官有地の購入を決定した。それが小石川区大塚町56番地である(地図5)。7年1月建築工事開始、12月校舎ほぼ完成、8年1月11日授業開始となった。校舎は鉄筋コンクリート造り3階建て、暖房設備・電気・ガス等完備で当時としては進んだものであったという(地図6 ●)。ほかに雨天体操場・お塾(寄宿舎)・校長住宅があった。

ここで遭遇した二つの大きな出来事がある。一つは戦争である。16年には跡見女学校報国団を結成し、以後、勤労奉仕、軍事産業に従事、などということがあり、20年には4月・5月の空襲で、体育館焼失、本館・新館が部分焼失した。もう一つは学制改革である。18年4月1日高等女学校令により跡見高等女学校と改称、21年4月3年制専攻科設置、22年跡見学園中学校、23年跡見学園高等学校を設立、24年4月2年制の跡見学園高等学校専攻科を設置した。25年3月14日跡見学園短期大学を設立、26年3月跡見高等女学校専攻科を廃止、13日財団法人跡見女学校を学校法人跡見学園に組織変更した。ここに跡見女学校の名は消えたが、中学校・高等学校・短期大学を生み出し、さらに後には女子大学を、また大学院を設立することへと進展していく。



地図5 「地籍地図」(注11) にみる大塚町56番地
2カ所に「官有地 五六」としてある(*1 *2)。
ちなみに泉鏡花は明治31(1898)年から57番地(*3)に住み、
『照葉狂言』を書いた。樋口一葉にはがきを出している。



地図6 「小石川区詳細図」
日本統制地図株式会社
昭和16年6月15日刊

- (注1) 『跡見花蹊日記』第1巻 跡見学園 平成17年12月20日発行
- (注2) 沢 宣嘉の家。『跡見花蹊先生実伝 花の下みち』(跡見学園 平成2年9月1日発行)の「付載 人名略歴」参照。
- (注3) 3月28日の日記に「小川町猿楽町安永の邸見ニ行候処、陽気の家相ニテ皆々氣ニ入」、4月6日買得の約定、7日引越、8日御わたまし、とあるのは三崎町一丁目の姉小路家のことであろう。地図2でその位置と構えを知ることができる。
- (注4) 『跡見開学百年』跡見学園 昭和50年10月21日発行
- (注5) 『五千分一東京図測量原図』財団法人 日本地図センター 2011年3月25日発行
- (注6) 『写真で見る跡見学園の歩み』跡見学園 平成12年10月10日発行
- (注7) 『跡見学園九十年』跡見学園 昭和40年10月30日発行
- (注8) 他に「東京郵便電信局地図」(樋田満文編『明治時代東京区分図』東京堂出版 昭和51年5月25日発行)の「小石川区」(明治29年10月)には該当地に校名入りであり、地図4の『江戸明治東京重ね地図』(エーピーピーカンパニー 2004年7月30日増補改訂版発行)には校舎がカラー図入りである。
- (注9) 『礫川徜徉記』大正13年4月20日刊(荷風全集 第16巻 岩波書店 昭和39年刊)
- (注10) 『太陽のない街』昭和4年11月 戦旗社刊
- (注11) 『地籍台帳・地籍地図 [東京]』第6巻 地図編2 (柏書房 1989年刊)